

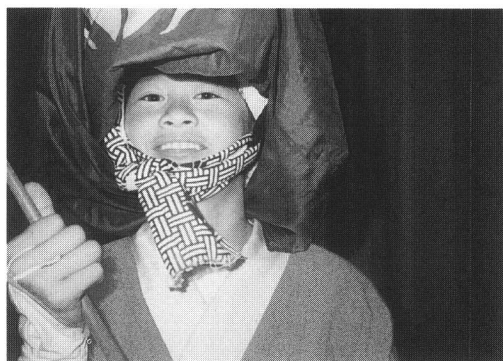
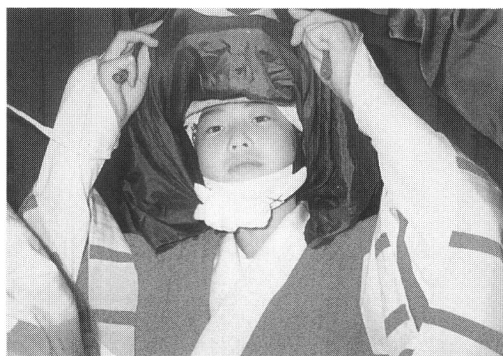
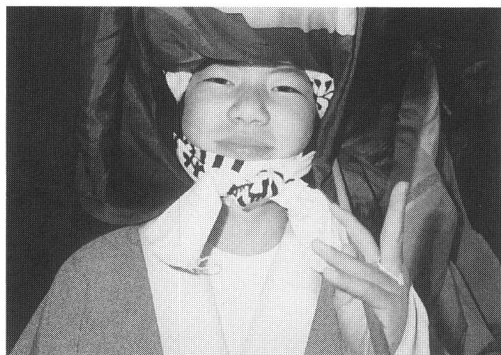
村の生涯フェスティバルで、川小子ども獅子として踊ってみないか。」と、声をかけられました。

二回目のクラブの時間に、さっそく小松彼岸獅子会の三人のおじいさんに踊ってもらいました。ついさっきまでやさしく、ほほえんでいたおじいさんたちの表情が、みるみる変わり、三人の息がびったり合い目が真剣そのものでした。独特な踊りなので、おかしくてやだなと思った自分はずかしくなりました。踊り終わったおじいさんたちの顔には、満面の笑みが浮かんでいました。引退したおじいさんたちがなぜ忘れず覚えていいのか不思議でした。おじいさんにそっと聞いてみると、こんな返事が返ってきました。

「獅子舞を踊るのが好きだからって言うこともあるが、獅子頭をかぶって踊るまでには六年かかっているからな。忘れることはできないんだよ。鶴ヶ城の祭りの行事の時、小松彼岸獅子が先頭に立って踊っている姿を、昔はみんなあこがれていたからな。」

と話すおじいさんの顔はとて、うれしそうでした。このような獅子舞に対しての思い入れがあるからこそ、今でも受けつがれているのでしょう。

まず、最初に私達が教えてもらったのは、「おおぎり」という踊りでした。この踊りは、前へ出たり、後ろへ下がったり、太夫獅子に合わせに進んだり下がったりと細かい動きがたくさんある踊りでした。細やかさの中にも、三びきの獅子の息も合わせなければならぬところが大変でした。



次に、教えてもらった踊りは、「おかさき」という踊りでした。足の動きに合わせて首をふる動きが多く、首を深く曲げすぎてもいけないという細かいところに気を使いながらの表現は、難しいものがありました。どうか、二つの踊りを覚え、今度は、踊りの役を決めるときに、獅子には、雌獅子、雄獅子、太夫獅子と三役からなっていること、真中で踊る獅子が女の獅子だということ、獅子の中で雌獅子は、三びきの中心になるので、一番責任があるということを聞きました。どうせやるのなら、一番責任があるという雌獅子だと思い、自分から進んで、やってみたいという気持ち伝えました。前の私には想像もつかないほど、彼岸獅子にのめりこんでいました。

それから、夏休みにも四回ほど特別練習がありました。せみの鳴き声も暑さも忘れ、はやく覚えたいという一心で練習しました。しかし、どんなにやっても、おじいさんたちの踊りにはかないませんでした。思い入れが違うのでしょうか。それから、夏休み、一回だけ、たいこと笛を